

2023年9月14日

立教大学国際学術研究交流制度
2023年度「派遣研究員」報告書

1. 派遣概要

所属・職	異文化コミュニケーション学部・教授
氏名	松下 佳世
派遣機関名	Institute of Translation and Interpreting, School of Applied Linguistics, Zurich University of Applied Sciences (ZHAW) 所在国：スイス
研究テーマ	通訳における認知的負荷についての実証研究成果の共有と日英通訳への応用について
派遣期間	2023年8月6日～2023年8月17日（12日間）
研究経費	562,069円

2. 派遣期間中の活動

離日および帰国日を含め、派遣期間中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。

活動内容記入例) ○○に関する調査、○○氏と研究討議、共同研究、講演、視察等

年月日	活動内容
2023年8月6日	離日、現地到着
2023年8月7-11日	チューリッヒ応用科学大学（ZHAW）のヴィンタートゥール・キャンパスにて、受け入れ研究者の Michaela Albl-Mikasa 教授から同大の CLINT (Cognitive Load in Interpreting and Translation) プロジェクトについての説明を受け、質疑応答を行った。また同教授の案内のもと、通訳翻訳プログラムとその関連施設を視察するとともに、以下の研究者と意見交換した。 <ul style="list-style-type: none">・ Christina Mäder: Head of conference interpreting MA programme・ Paul Kelly: Researcher, Institute of Language Competence・ Alice Delorme and Chantal Wright: Head of Institute of Translation and Interpreting・ Anne Catherine Gieshoff: Post-doc, CLINT project・ Sarah Ebling: Head of barrier-free communication
2023年8月14-15日	ZHAW のチューリッヒ・キャンパスにて、関連学部ならびに施設の視察と資料収集
2023年8月16日	現地出発（翌日帰国）

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果、今後の研究の展望、本学と派遣機関との研究交流にかかる成果、展望等を記入してください。

通訳研究領域においては近年、AI（人工知能）を中心とする新しい技術の導入とその影響について活発な研究が行われている。筆者自身も科研課題「多元自動通訳システムと評価法に関する研究とその応用展開」（課題番号 21H05054）に研究分担者として参加しており、この分野での研究を進めているところである。今回訪問したチューリッヒ応用科学大学（ZHAW）は、2018年から2022年にかけて、スイス政府の助成金を得て、CLINT（Cognitive Load in Interpreting and Translation）プロジェクト（<https://www.zhaw.ch/en/linguistics/institutes-centres/iued-institute-of-translation-and-interpreting/research/clint/>）を実施し、人間と機械が共存する近未来における通訳と翻訳のあり方についての検証を行った。今回の訪問の主たる目的は、その成果についてプロジェクトの研究代表者（PI）である Michaela Albl-Mikasa 教授や、研究分担者の Anne Catherine Gieshoff 博士から直接話を聞くことにあった。

同プロジェクトの分析対象は非標準英語（non-standard English）としての ELF（English as a Lingua Franca）である。将来的な AI による自動通訳の導入を想定した場合、ELF のインプットをどう扱うかは大きな課題となる。なぜなら、現在のところ自動通訳は原発話を訳漏れのない形で訳出することを目指しているため、ELF の制約により原発話自体の意味が不明瞭だったり誤りを含んだりしている場合、それが訳出にもそのまま反映されてしまうからである。Albl-Mikasa 教授らの研究は、人間の通訳者が ELF に対して認知的負荷を感じながらも、自らが介入することによって、コミュニケーションの伝達を可能にしていることをデータで示しており、その詳細について知ることによって、今後の研究への多くの示唆が得られた。

また、今回の訪問では、上記のプロジェクトにも使われた常設実験施設である Usability Lab も見学したが、マジックミラーと複数のカメラや録音装置を備えた実験室に、VR ゴーグルなど最新の機器が揃っており、通訳研究がデータ駆動型に移行しつつあるのを感じた。

また、ZHAW は本学の国際交流協定校でもあることから、今後、通訳翻訳研究の分野でより緊密な連携を行なっていく可能性を模索するため、同大の Institute of Translation and Interpreting の関係者とも幅広く意見交換を行った。通訳翻訳プログラムを率いる Alice Delorme 教授と Chantal Wright 准教授とは、異文化コミュニケーション研究科との間で新たに協定を結び、修士レベルで 1 学期または 1 年の交換留学を可能にするための前提条件などについて議論した。修士課程の通訳実践を教えている Christina Mäder 講師からは、毎年 5 人程度を厳選して実施している ZHAW の通訳者養成プログラムについての説明を受け、通訳ブースを備えた実技教室を見学した（ZHAW には 11 の練習用ブースがある。立教は 2 つ）。バリアフリー・コミュニケーションを専門とする Sarah Ebling 教授とは、手話通訳者の養成と、テクノロジーの導入（アバターを使った手話通訳の提供など）について意見交換した。

通訳翻訳関連以外では、本学の英語教育研究所と長年連携している Institute of Language Competence の Paul Kelly 博士と面談し、今年 3 月に来日して本学で実施した English-Medium Instruction(EMI)のワークショップについて話を聞き、今後両大学がさらに連携を深めるためのアイデアを出し合った。

訪問後半には、チューリッヒのメインキャンパスを視察し、図書館で資料収集を行なった。

今回の訪問は、夏季休暇中であつ短期間の滞在であつたにもかかわらず、最新の研究成果について直接話を聞いたり、今後の連携の可能性についてさまざまな側面から協議したりと、非常に有益なものであつた。この訪問で得たものを今後の研究ならびに教育（および留学生支援）に生かしていきたい。



Alice Delorme 教授、Chantal Wright 准教授と今後の連携について協議



通訳ブースが並ぶ実技教室



チューリッヒのメインキャンパスも視察